

静岡新聞 2025年11月26日 付

## 論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

愛媛県新居浜市にある別子銅山に行く機会があった。歴史の本などで読む機会はあるが、現地に出向いてみるとあらためて驚くことが多くある。

別子銅山は江戸時代から昭和にかけて操業した大鉱山である。住友家により運営された事業であり、ここが起点で住友が大財閥に発展する基盤となった。現在は山中に巨大な産業遺跡が観光施設として残されており、「東洋のマチュピチュ」と呼ばれて親しまれている。千ヶ近い高地で、最盛期には1万人近い人が生活しており、病院から学校まで設備が整っていた。

銅の精錬も銅山から近い所にある瀬戸内海の島で行われていた。銅の精錬では鉱石の中の硫黄分が亜硫酸ガスとして発生するので環境汚染が深刻である。別子銅山に限らず、

# 別子銅山の環境対策

日本の各地の銅山では、この公害問題にどう対応するのかが大きな課題となった。

住友による公害問題への対応は注目に値する。公害をなくすことに取り組むことで、新たなビジネスに広げていくというものだ。具体的には公害物質となる亜硫酸ガスを硫酸として抽出し、それを加工することで過リン酸石灰という肥料にしようというのだ。

こうしてスタートした住友の肥料ビジネスは、その後住友化学という日本を代表する化学メーカーに発展していくことになる。住友化学は現在は様々な化学分野でビジネスを展開しているが、肥料ビジネスは現在でも同社にとって重要な事業となっている。

別子銅山の環境対策でもう一つ注目すべきは、山の森林保護の問題であった。銅鉱石の採掘によって別子の山はほとんどはげ山状態になっていた。銅山の事業は大量の木材を必要とする。精錬用の燃料や坑道の資材などに利用するためだ。そのため木材を伐採することで、山ははげ山状態になった。

そこで住友はピーク時には年間200万本という植樹に取り組むことになる。現在の別子の山は樹木に覆われてお

り、かつてのはげ山の時の写真とは大きく異なる。植林の努力の成果が出ている。

この植林の事業は現在、住友林業として受け継がれている。住友の山林は全国に広がり、植林、森林保全、木材供給で重要な役割を演じている。一般の消費者にとっては、住友林業といえば木造住宅の供給メーカーとしてのイメージが強いかもしれない。住友林業の住宅サービスは、現在は海外に大きく展開している。

住友化学にしても住友林業にしても、当初は環境問題への対応ということからスタートした。ただ、その問題に真剣に対応していく中で、いつの間にか日本を代表するビジネスに拡大することができた。しかもそのビジネスは日本国内にとどまらず海外に大きく展開することになる。

現代的な言い方をすれば、SDGsということになる。持続可能な開発目標の略だ。企業活動ではSDGsを重視することが求められている。そうした行動規範を重視することは、社会の構成員としての企業の義務であることはもちろんである。ただ、住友の歴史が物語るように、企業の発展にとっても大きな成果につながるようになるのだ。